

仮想空間上で課題を考え創造する若者の ウェルビーイング向上を支援する活動

(市町村名) 富山県

提案・指導教員 富山大学 教育学部 学長特命補佐(客員教授) 成瀬喜則

(参加学生) 高橋海向(3年)、八木悠希菜(4年)、横井 京(4年)、田上翔子(修士1年)
鈴木聖矢(修士1年)

1 課題解決策の要約

本事業では、地域の活性化に必要な要素を高校生・大学生(以下、若者)が協働で調べ、若者が地域で活躍するために必要な事柄を明らかにした。

まず、地域で事業展開している人を対象にしてインタビューした。若者がこれらの活動を通して地域と交流を持つと共に、地域で活動するモチベーションや必要な支援について議論してまとめた。キーワードとして、ビジョンの確立、スモールビジネスのモデル化、自己実現などが挙げられた。

次に、議論を深めることができるように、仮想空間上で地域を再現して、どのような地域活性化が考えられるか検討した。県内外にいる若者が仮想空間上で協働し、その活動を通して達成感や自己肯定感を高め、地域を深く学び考えて、地域に対する理解や愛着が増し、地元さまざまな形で貢献しようという意識を高めることを大切にしたい。そのため、仮想空間の完成度を高めることのみに意識が向かうことがないようにして、新しい地域を創造することを意識付けした。

最後に、連携している地域の方に対する報告会を開催して、多くの示唆を得ることができた。

2 調査研究(企画・実施を含む。)の目的

本事業の目的は、「地域の活性化」をテーマに、若者が協働して学び、地域社会と深く関わることを目的とした。具体的には若者が地域の商店街等が持つ背景を主体的に学び、商店街の新しい方向性を自分事としてとらえ提案することにある。これによって、地域に対する理解や愛着が増し、地元さまざまな形で貢献しようという意識を高めると同時に、若者の自己肯定感を高めることができた。

まず、地域で活躍している方へのインタビューやグループワークによって地域の活性化に関するキーワードを見いだすことができるようにする。さらに、若者が協働でメタバース環境を使って仮想空間上の商店街等を再現し、新しいコンセプトやキーワードを創造する環境を提供した。

対面とオンライン形式で議論を進め、多くの方々の協力も得ることで、地域活性化について深く考える機会とした。参加した高校生・大学生は地域への愛着や貢献意識を高めるとともに、自らの達成感や自己肯定感を育む貴重な経験を得ることができた。

3 調査研究(企画・実施を含む。)の内容

多くの若者が参画して本事業に取り組むことで、新しい発想による問題認識、課題解決策の創造が可能となる。そのために、県外の高校とも協働で課題解決策の提案を考えることにした。

また、若者が地域と関わりを持つことで地域に貢献したいと思う気持ちを育成することができる。そのた

め、仮想空間上であっても地域を表現し、課題に対するさまざまなアイデアを出す機会を提供することが重要であり、若者のウェルビーイング効果を出すことが可能となる。つまり、所在地に関係なくオンラインで参加できる環境が必要であり、富山県を離れて生活している若者でも参加できることが重要となる。そこではさまざまな人との交流が生まれ、大きな活力となることが期待される。

活動内容は図1の通りである。

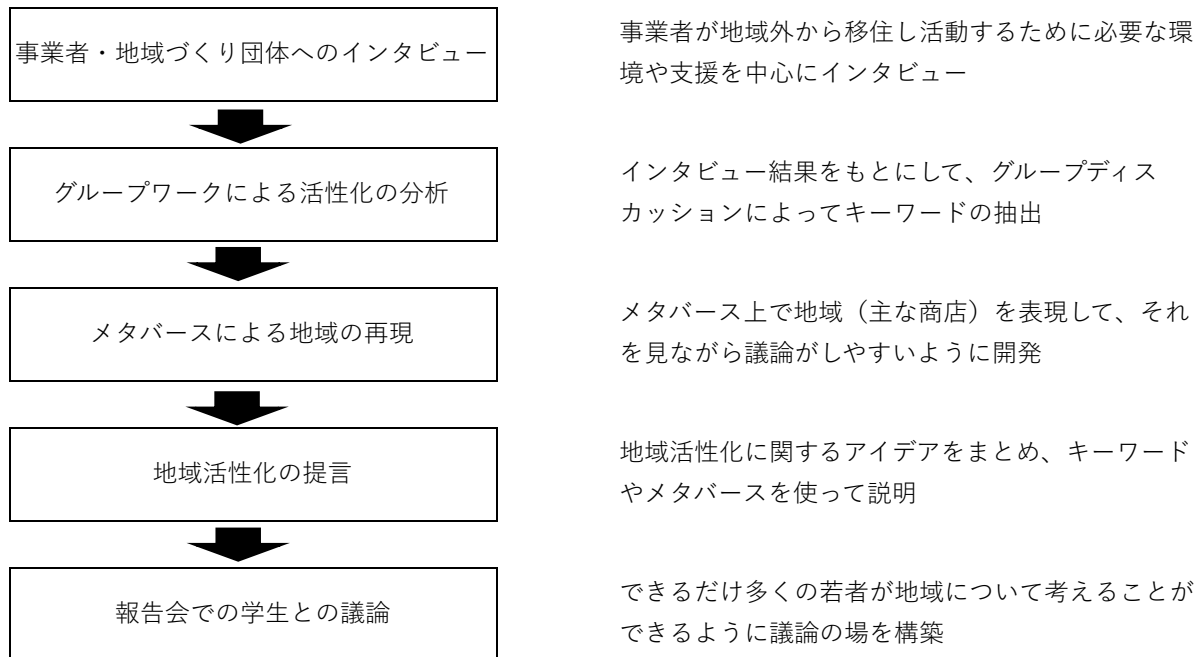


図1 事業活動の流れ

(1)地域へのインタビュー調査

まず、地域で事業活動している方へのインタビューやプロジェクト参加者との意見交換をもとに、地域の人々の思いをいくつかの視点からまとめた。なお、まとめにあたっては生成 AI を利用した。

①事業活動意欲の向上

不慣れな土地で事業を始めるモチベーションは、「独立する」という明確な目標を持ち続けたことにあると考えられる。

②地域づくりへの意欲

地元の事業経営者が協力して地域の発展を推進するという目的を共有して活動をしている。そこでは自立意識を高く保っている。

③支援環境の存在

事業を行うためには、さまざまな方面からの支援体制が必要であり、意識向上の支えにもなる。地域まちづくり団体から、必要な情報や支援を得ることで事業を活性化させることができた。また、事業者同士のネットワークを通じて、さまざまなノウハウを共有し、業種が異なってもそれぞれのリソースを補完し合う環境の存在が有効である。

④信頼関係の構築

新規事業者が活動する際には、地域住民の理解を得ることが必要である。住民参加型のイベントや交流の場も設けたりしており、事業活動の認知度の向上にもつながっている。

⑤自律的経営の努力

自らの経営力で持続可能な体制を築いている。行政と地域事業者が連携し、地域ブランド力を高める取り組みが有効である。さまざまな事業者との連携により、流通網や販売チャネルの拡充、信頼関係の構築も行っている。

(2) グループワークによる議論と仮想空間上での地域再現

現地での活動を終えた後、学生がグループワークをして地域で活動する際に必要な環境、考え方等について話し合った。学生が考えた地域再生のキーワードは下記の通りである。

- ・地域のブランド化を高めること
- ・人々が集まる空間の創出をすること
- ・新しいビジネスモデルを作ること
- ・事業展開のための支援を得ること

インタビュー結果からの考察とメタバースを活用したグループディスカッションによって調査結果をまとめた。これらの調査を基礎として、高校生や大学生がグループ活動によって、地域で活動する上で必要な環境や意識についてまとめ、若者が地域に関わりウェルビーイングを高めるためのキーワードを抽出した。

4 調査研究(企画・実施を含む。)の成果

本事業の成果を複数回にわたって報告した。アンケート項目の内、地域の貢献意欲、地域での活動意欲に関する項目について、報告を聞く前と聞いた後でどのように意識の変化が見られるか調べた。5:とてもそう思う、4:そう思う、3:どちらとも言えない、2:思わない、1:全く思わない、の5件法で質問している。

その結果、地域を知ることの大切さ、地域に貢献する意味、地域で活動することの意義を実際に聞くことで、地域貢献に対する意識が変わる可能性が高いことがわかった。

また、地域で実際に活動する方々の考え方をすることで意識の変化が見られる。働くことの意味を考えることで、さまざまな働き方があるということを知り、これまで考えたことがなかった地域観、職業観に変化が見られた(図2)。自由記述欄を見ても、実際に地域外からその地域に来て活動している方々の話を聞いたりすることで、より深い考察をすることができるようになったと思われる。

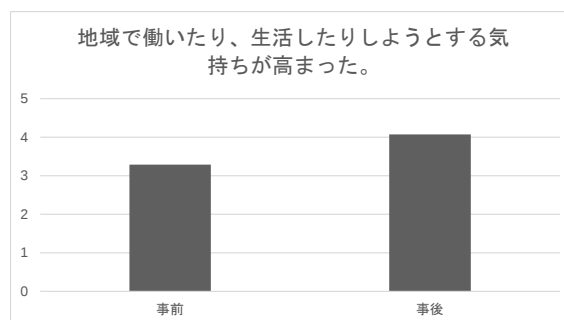


図2 地域での生活に対する学生の意識変化

発表会で事業の説明や質疑応答が終了した後に実施したアンケート調査で、以下の2項目について自由記述してもらった。質問項目は次の2つである。Q1:将来、地域で生活したり働いたりするときに、何が必要か、Q2:将来、地域でどのような仕事や活動をすることで幸福感が増すと思うか。

Q1 については以下のような回答が得られた。

- ①交通の利便性向上
- ②娯楽施設の充実
- ③教育環境の整備、子育て・生活支援環境の強化
- ④経済的環境の改善
- ⑤地域愛や郷土愛の育成

Q2 については、以下のような意見があった。

- ①地域の人とのつながりや交流を促す活動
- ② 子育て・教育・福祉に関する支援
- ③ 精神的支援環境の充実
- ④ 労働環境の改善に関連した活動
- ⑤ 地域活性化・観光促進活動

これらの回答から、学生は「交通・娯楽の充実」「人との交流の場づくり」「働きやすい環境の整備」「地域活性化への貢献」に幸福感や価値を見出していることがわかる。

5 調査研究(企画・実施を含む。)に基づく提言

別のグループでは、企業経営という観点で地域活性化を考えるという視点の重要性を学んだ。単に生活の快適さや労働環境の良さに目を向けるのではなく、いかに自己実現していくかという観点で考えるようになったと思われる。

「人々と関わり、地域からの要望に応えられる仕事や活動」「地域の人と一緒に目標とする地域像を共有すること」「地域の魅力と課題をテーマにして地域課題を解決すること」「地域活性化のための活動が幸福感を増す」など、人との関わりや魅力発信によって人とのつながりが増えることの重要性を考えるようになっている。

6 課題解決策の自己評価

大学生、高校生、中学生を対象として、事業に参加した学生の発表や仮想空間上での説明、経営戦略的な分析を入れた説明会を複数回開催した。説明を聞き、グループ活動をして考える時間を設けた結果、地域に対する思いや地域で活動することで得られる自己肯定感に関する考え方に深まりが出てきたことがアンケートや振り返りなどから明らかになった。

本事業は、「地域の活性化」をテーマに、高校生と大学生が協働して学び、地域社会と深く関わることを目的に実施してきたが、その結果、高校生と学生は調査・分析力、コラボレーション力、プレゼンテーション力など、様々な力を身につけることとなった。これらの一連の活動は、通常の授業である座学のみでは学習できない経験である。本事業で活動した経験は、高校生や学生が社会に出て活躍する際の自信となる。

一方向からの見方ではなく、さまざまな観点からの分析方法を学ぶことで、表面的な見方だけでなく、深い学びによる複眼的な見方をする事ができたことは収穫であった。

若者が仮想空間上で自由に議論し、地域に関する興味関心を高める活動を十分に行うことができなかった。この環境を今後さらに活性化させて、若者の創造する力を育成し、自己肯定感を高める実践を行っていきたい。